シリーズ那珂川町の民話

ひばり塚

No. 5

那須与一宗隆がまだ十四、五歳の頃のお話です。

平城である神田城の東側、那珂川の川原付近は、今でこそ、長い堤防で仕切られ、家が建ち、広い耕作地となっていますが、その昔は、城の近くまで川原の一部で、ひばりの繁殖地となっていたため、当時は「ひばりが原」と呼ばれていました。

与一がいつものように数人の供を連れて弓の稽古をしていたある日のこと、供の者が「飛んでいるひばりを射落とすことができますか」と言うので、与一はしばらく考えてから、飛び上るひばり目掛けて矢を放ちましたが外れてしまいました。しかし二度三度繰り返すうちに、三羽のうち二羽に命中するようになりました。与一の弓上手は近在に評判となり、遠くの伊豆にいる源頼朝の耳にも届きました。頼朝が家来に命じて「それ程の弓の名人ならば、ひばりの蹴爪（けづめ）、千羽分を献上せよ。それによって身分を高く取り立てる」と伝えてきたので、与一は大変喜び、毎日ひばりを射落とすのに精を出しました。

ある時、近所の娘に蹴爪を数えさせ、九百九十九羽になった時、与一はたまらなく眠くなり、真っ暗闇の中で夢を見ました。暗闇の中から金色のひばりが現れ、「私はひばりの精なるぞ」と言って、「出世欲のため、汝はひばりの尊い命を奪っている。楽園は地獄と化しているぞ。今日限りひばりを射落とすのを止めなさい。その代わりお前がいつもひばりを射落としている場所に、金色のひばりが飛び上る。そこに鏑矢（かぶらや）がある。その矢を持っていれば、のちに武名を天下に上げ、誉（ほまれ）を永く家に伝えることができる」と言うと金のひばりは消え、与一は目を覚ましました。

その後、与一は自分の行いを悔い、射落としたひばりを埋めて塚を築き供養しました。

やがて年月が経って、舟戸のどの辺にひばり塚があったのか、今では誰にも分からなくなってしまいました。

文化財愛護会会員　福嶋　正

那珂川町再発見　日本再発見

ケビン　ブラックバーン

第12話　「バイリンガル日本人」

「万国共通語」と言えば、何が思い浮かびますか？英語でしょうか？英語を話せる人口は一番多いですが、英語を遥かに乗り越える万国共通のことばがあります。

音楽は確かに「ことば」の一つです。日本語や英語と同じように音楽のジャンルにより様々な「なまり」や「方言」があります。時代の流れと共に変化します。初めて聞く時には「よくわからない」と思うかも知れませんが、接する時間が多くなればなるほど、表現の仕方を把握し、少しずつ理解できるようになります。

７月11日に、ウイーンJSBM・音楽大学ユースオーケストラは、あじさいホールで開催された音楽交流コンサートで演奏をしました（コンサートは広報の12ページに載っています）。このコンサートは「社会を明るくする運動」南那須地区推進大会のアトラクションでもあり、ホールは満席でした。

オーケストラが演奏したのは、主に地球の反対側にあるヨーロッパで生まれたバロックとクラシック音楽でした。この音楽が作成された頃、日本は江戸時代でした。お琴、三味線、尺八や琵琶で演奏する音楽が盛んでした。

江戸時代の楽器も音楽のスタイルもこのコンサートとはまったく違います。

コンサートは音楽交流のイベントでした。那珂川町と那須烏山市から来た社会を明るくする運動の参加者、一般町民、そして那珂川町第九を歌う会の会員とその家族も大いに楽しんだと思います。特に喜ばれたのは第九を歌う会とユースオーケストラが共演した３曲で、「荒城の月」、「見上げてごらん夜の星を」と「ふるさと」でした。ユースオーケストラはただ楽譜を見て演奏するだけでなく、第九を歌う会のエネルギーと感情がウイーンの青年に通じ、国籍を超えて一体化した気がします。とても感動的でした。

時代と文化を超え、万国共通語である音楽に「バイリンガル」な町民は多かったです。那珂川町でまた新たな発見ができました。

広報文芸

俳句

万物の微動だもせぬ日の盛り　松野　青木　俊蓉
オペを待つ窓に重たき梅雨の空　久那瀬　星　健彦
最上川の船頭美声山ぼうし　松野　横山　義夫
母の日に母の温もり無言坂　久那瀬　堀江　直子
飲み干しのコップに映る小さき夏　小川　金井　和子
梅雨催雲を支へて大欅　小砂　松岡　路石

短歌

初生りの南瓜を　げば切り口に吸い上げし水滴り匂う　盛泉　岡　イチエ
球体の花揚げ咲くアガパンサス　ウルトラマリンの地球が見える　馬頭　佐藤　節子
沙羅の花ひと日を生きてふたつみつ根方に白く品位を保つ　和見　藤田　和夫
じゃが芋を掘り進む前へコロコロと可愛いトマトみたいなこぼれ実が　小川　森島テフ子
秋の日はたちまち暮れて気ぜわしくあたり一面夕暮れ迫る　片平　磯部　千代
妻の背の丸味の目立つ昼下りお茶を入れたり肩を揉んだり　小川　平澤　照雄

川柳

てきぱきと団体捌く女将さん　谷田　岡崎　友子
てきぱきの処置に急患助けられ　小砂　笹沼　季子
嬉しいも悲しい時も電話する　小川　平澤　照雄
逆転へガッツポーズの子の笑顔　薬利　大嶋　克明
家事育児野良仕事までこなす母　大山田下郷　佐藤　有紀
褒められてから作文が好きになり　谷田　岡崎　甫子

新着図書

那珂川町図書館

『植物図鑑』

有川　浩／著（角川書店）

ある日、道端に落ちていた好みの男子。「お嬢さん、よかったら俺を拾ってくれませんか?」
料理上手な彼に、ハウスキーパーを頼むことにして始めた二人の共同生活は、次第にかけがいのない日々となっていく。
ストーリーの中に、野草についての知識も盛り込まれた、読んで美味しい恋愛小説。

『ジパング島発見記』

山本　兼一／著（集英社）

種子島に鉄砲を伝えた男ゼイモト、冒険商人ピント、イエズス会宣教師ザビエル、『日本史』を著したフロイス・・・。
十六世紀、日本にやってきた七人の西洋人の目を通して、日本という国を浮き彫りにする連作短編集。
西洋文化と接したことによって、日本はどのように変わったのか。そして、変わらなかったのか。
直木賞を受賞した著者の、受賞後第一作。

『0・1ミリのタイムマシン』

須藤　斎／文（くもん出版）

地層の中に残されたさまざまなことをくわしく調べ、地球のことを明らかにしていく学問を、「地質学」といいます。その中でも、化石を使って調べる研究が、「古生物学」です。
いつごろ、どんな生きものが地球上に生きていて、そのときどんな環境だったのか、地球の過去をのぞきみる、タイムマシンのような研究について書いてある本です。

◇『ふちなしのかがみ』　辻村深月／著（角川書店）
◇『宵山万華鏡』　森見登美彦／著（集英社）
◇『デンデラ』　佐藤友哉／著（新潮社）
◇『銀二貫』　高田　郁／著（幻冬舎）
◇『カンランシャ』　伊藤たかみ／著（光文社）
◇『のぶカンタービレ!』　辻井いつ子／著（アスコム）
◇『高校生からわかる「資本論」』　池上　彰／著（ホーム社）
◇『史上最ラクフリージング大革命』　村田裕子／著（講談社）
◇『子どもたちの遺言』　谷川俊太郎／著（佼正出版社）
◇『図書館で出会える100冊』　田中共子／著（岩波書店）